
ミューズの子

森宮 流架

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミューズの子

【Nコード】

N8462F

【作者名】

森宮 流架

【あらすじ】

とある世界の片隅で紡がれていく物語。歌姫セシユと楽師ヴァスが偶然出会った少女は

迷い子

夕闇があたりを包んでいた。

一人の質素な服に身を包んだ女が、まだ幼い・・・7・8歳くらいだろうか。少女を連れ、森の奥を歩いていた。

「かあさん、何処まで行くの？もう、暗くなるよ？おうちに帰ろうよ。」

不安そうな少女の声に、顔を強ばらせ、歩を進めていた母親が振り返った。

今にも泣き出しそうな、けれど、何かを決心したような顔で。

ゆっくりと少女の前に跪くと、母親は大きな木のうろを指さし、ゆっくりと諭すように言った。

「かあさんはすぐに戻ってくるから、お前はここで待っていておいで。」

2

まっすぐに見つめるその視線は、拒むことを許さない、そんな目だった。

何かいつもと違う母の様子に、少女はおびえながら頷いた。

「すぐに戻ってきてね？」

娘の言葉には返事をせず、母親は一度強く少女を抱くと、うろの中へ座らせた。

少女の顔をじっと見つめ、後ずさり、そのままきびすを返すと森の中へ消えていった。

少女は膝を抱え、うろの中で震えていた。

少女にはわかっていて、きっともう、母親に会うことは二度とない

だろう、と……。

「全くもう、だから街道を行こうと言ったのに！」

「ばあか！街道を行ったんじゃ間にあわねえんだよ！」

セシユはイライラと夫、ヴァスの脛を思いつきりけり上げた。

「つてえな！怪力女！」

「森を抜けたつてこれじゃあ間に合わないじゃないのさ！ああ、もう、どうすんのよ！」

「うっせえな、来ちまったもんはしょうがねえだろ？ちったあそのうるせえ口閉じていられないのかよ！」

そのとたん、セシユはピタリと口を閉ざし、あたりを見渡し始めた。

「……はじめからそうしてりゃかわいげあるんだけどなー」

ぶつくさ言うヴァスの口を押さえ、セシユはしいつとしてみせた。

「ね。あんた、何か聞こえない？」

「んあ？この森に魔物が出るなんて話は聞かなかったぜ？」

「そうじゃなくつて……子どもの声……？」

「こええこと言うなよ！」

こんな夜更けに子ども声だと？ばかばかしい……そう言いかけたヴァスの耳に、確かに風にのって、まだ幼い少女の押し殺したような泣き声が聞こえてくる。

「あっちからよ。ヴァス。」

セシユは声を頼りに森の中を歩き出した。

「お・・・おい、セシユ・・・」

少し躊躇をしたヴァスに構うことなく、セシユは森を進んでいく。もしも魔物だったらどうするんだ。むしろ普通の人間の子どもがこんな夜更けに森の中に一人だなんて事は、どう考えても不自然だろう。

そう言いかけたが、自分の女房の性格を思いだし、口を噤む。セシユは以前自分の子どもを流産している。その時が原因でもう、子どもの望めない体になっていた。無類の子ども好きのセシユのこと、止めたところで聞きはしないだろう。

やがて二人は一本の古木の前にたどり着いた。

声はこの中から聞こえてくる。

セシユは古木をぐるりと回ってみた。

ぽっかりと空いたうろの中でうずくまって声を殺して泣く少女。

人の気配を察したのか、少女がふいに顔を上げた。

「かあさん・・・？」

一瞬嬉しそうな笑みを見せたが、待ち人ではないことを確認すると、にわかに少女の目が曇る。

セシユは少女を怖がらせないように、うろの前に腰を降ろすと、優しい声で語りかけた。

「どうしたの？迷子？」

少女は悲しそうに首を振った。

「かあさんと一緒なの。．．．ここで待っててって言われたの。すぐに戻ってくるからって。」

「何時からここにいるの？」

「お日様が沈む頃から．．．。」

今は深夜。日没からはすでに6時間は経過していた。

セシユは少女に気がつかれないようにため息を漏らした。

この子はおそらく貧しさから、ここに捨てられたのだ。

この国は今こうした貧困者が大勢いた。森に子どもや年寄りが捨てられるのは珍しいことではない。

親はきつと身を切られる思いでこの子を捨てていったのだろう。

セシユが少女に触れると、少女の体はまるで氷のように冷え切っていた。

「もう、真っ暗なものね。きっとおかあさんは貴方を見付けられなかったんだと思うわ。」

街で待っていたら来るかも知れないから、貴方さえ良かったら、私たちと来る？」

少女は少し考えるようなそぶりを見せ、セシユの後ろのヴァスに目をやった。

「いいの？と言いたげな目。」

ヴァスはすぐめそうになる肩をなんとか動かさないようにしつつ、にこり、と笑って見せた。

「言いだしたら聞かないのはわかっていた。」

こっくりと頷いた少女に、外套をかけてやりつつ、ゆっくりと森を歩き出す。

幸い古木の前には道が続いている。ここを行けばやがて街へ出られるだろう。

「あたしはセシユ。歌い手よ。こっちは夫のヴァスで楽士。あたし達、夫婦で旅をしてきたの。」

「・・・あたしは、フィレーン・・・。ユクタの村から来たの・・・。」

ヴァスの顔が曇る。ユクタはここに来る前に通ってきた。

どうやら内乱があったらしい。村は壊滅状態で、おびただしい数の死体が山積みになっていた。

おそらくここまで逃げ延びたが、食料や水が底をついたのだろう。

少女が哀れでならなかった。

母親は自分の食料確保のために少女を捨てたのだろうか・・・。

ふと視線を左に移し、ヴァスは少女の視界を遮るように少女の左側に移動した。

闇の中に、うつすらと浮かぶ影。だらりと木から垂れ下がった姿は女性の物であることは、その服の様子からすぐにわかった。

おそらく、あれがこの子の母親だろう。

共に死を選ぼうとして、愛するが故、殺めることが出来ずに、一縷の望みを少女に残したのだろう。

これもまた、この国では良くある話だ。

すでにこういった光景を見慣れてしまっている自分自身に落胆し、すぐ隣をうなだれつつ歩く少女の頭に手を載せた。

これも何かの縁かもな。

子どもがほしくて望めない夫婦と、親に捨てられた孤児の少女。

神様の与えてくれた運命だ。

木々の間から見え始めた街の明かりを眺めつつ、ヴァスとセシユは目を合わせ、同時に微笑んだ。

考えることは一緒のようだった。

秘密

セシユとヴァスに連れられ、街へたどり着いたのはすでにあたりが蜂蜜色に染まり始めた頃だった。

一軒の宿屋のドアを叩くと、ぎいっと音をたて、女将が眠そうな目をこすりつつ出てきた。

「なんだい、あんた達、約束は夕べだったじゃないか。こんな時間にこられても困るよ。」

「ちよつと道に迷ってねえ。女将さん、金は弾むからさ、。泊めておくれよ。この子も一緒にね。」

「ちよつと。。。この子、まさかユクタからの子じゃないだろうねえ？あそこから逃げた子を匿ったらこつちの首が飛んじまうよ。」

女将の言葉にはつとセシユはフィレーンに目をやった。

すでに幼いフィレーンが起きていられるはずもなく、よほど疲れたのか、ヴァスの腕の中ですよすやと寝息を立てている。

ほつとため息をつきつつ、セシユは女将の手に金貨を数枚握らせた。

「大丈夫、絶対にばれないようにするからさ。もしばれたら追い出されたって文句は言わないよ。ねえ、あんた。」

振り返ってヴァスを見ると、ヴァスは苦笑を浮かべ、肩をすくめて見せた。

「ち。。。っ仕方がないねえ。あんた達の歌を楽しみにしてる客もいるし。。。ここは見なかったことにしてやるさ。」

女将は懐に金貨をしまつと、中へと招き入れた。

フィレーンが目覚ますと、部屋には異様な匂いが漂っていた。

「ああ、フィレーン。目が覚めたみたいね。」

にこり、とセシユが振り返った。長い髪を一つに結び、シャツの袖をまくっている。

どうやら匂いの元はセシユの前に置かれた桶から漂ってくるようだ。中には黒い染料で満たされていた。

髪を染めるための染料の匂いだと言うことはすぐにわかった。

フィレーンが体を起こすと、それまで窓辺にもたれかかるようにして腕を組んで立っていたヴァスが、ふいにフィレーンに歩み寄ると、フィレーンの手を握りながらベッドの隅にしゃがみ込んで、硬い表情で口を開いた。

「フィレーン。俺の話をよくお聞き。良いかい？君のいた村、ユクタは、悪いヤツに襲われて無くなってしまった。」

「ちょ・・・ヴァス！」

止めようとするセシユを手で制し、ヴァスはまっすぐにフィレーンの目を見つめつつ、言葉を続けた。

「そしてね、ユクタから逃げてきた人を、その悪いヤツが捜しているんだ。君の事が知れると、君は殺されてしまうかも知れない。」

「・・・なら・・・かあさんは？」

どこか結果をわかっているような、淡々とした表情でフィレーンはヴァスを見つめた。

「かあさん、死んだのね。」

淡々とした口調。わかっていたと言いたげな言い回し。セシュが息をのんで口を押さえる。

涙すら見せないのは、傷ついていないからではない。

幼い少女には、あまりにも過酷な運命を、まだ受け入れることが出来ていないだけ。

ヴアスがゆつくりと頷いた。

目を伏せているフィレーンに諭すようにヴアスは言葉を続けた。

「君のおかあさんは俺が後で弔ってやる。君は今、何をすればいいか、わかるかい？」

「・・・捕まらないように、する・・・？」

ヴアスは大きく頷くと、これからどうすべきかを話し出した。

数時間後。

「フィー。今からあんたはあたしとこの人の息子よ。良いわね？」

黒く染まった手を流しつつ、満足げにセシュが振り返った。

そこには

長かった見事なまでの朱金の髪をばっさり短く切って黒く染めあげ、少年の服に身を包んだフィレーンの姿があった。

ミューズの子

エルシナの街の一角。『碧眼の黒猫亭』からは、人が扉の外にまであふれかえっていた。

酒場からは高く澄んだ歌声と、絶妙な音色のリユートの音が響いてくる。

類い希な美貌の『宵闇の歌姫』と、繊細な音色を醸し出す『音神の申し子』と呼ばれる楽士。

『ミューズの翼』と呼ばれるこの二人の名は、大陸の隅々まで知られていた。

彼らの歌を、傍らでじっと聴いていた少年が、曲が終わると同時に、帽子を持って客の間を歩き始めた。

「セシユ。このちび、いつの間に産んだんだい？前に来たときは連れていかなかったじゃないか。」

客の一人が歌姫に声をかけてきた。

「まだ小さかったんでね。親類に預けてたのよ。でも、もうフィーも8歳だものね。連れて歩いてても良いかなと思って。」

額に流れる汗を布で押さえつつ、セシユと呼ばれた歌姫はにこり、と微笑んだ。

「へえ。しっかし……。髪の色はあんたゆずりだが、顔までは似なかつたようだな。」

酔っぱらった客が少年の顎に手をかけた。

「かといってヴァスに似てるってわけでもねえな？浮気でもしたのかい？セシユ。」

「馬鹿な事お言いでないよ。」

体を固くしていた少年　否、少年に扮した少女、フィレーンをセシユが引き寄せる。

「フィーは俺の母親に似たんだ。文句あるか？」

じろり、とヴァスが酔った客をねめつけた。

「おっとつと。怖い怖い、そう怒るなよ、ヴァス。」

客はおどけたように両手をあげると、傍にいた仲間と共にまた酒を飲み始めた。

セシユ、ヴァス、そしてフィレーンがこの宿に腰を据えてから、数ヶ月がすぎた。

初めのうちは、顔を強ばらせ、口を開こうとしなかったフィレーンも、元々明るく、人なつっこい性格だったため、10日もする頃には、すっかり酒場の常連と馴染み、店の手伝いをするまでになっていた。

「よう、ボーズ。今日も元気だな」

「あのねえ、おっさん、何度言えばわかるの。ボクの名前はフィー！ちゃんと名前があるんだから、名前で呼んでよね！」

「それを言うなら俺はまだ『おにいさん』だっフィーの」

すっかり最近の日課になった常連とのやり取りをしながら、フィレ

ーンはくるくると店内を駆け回っていた。

注文を取ってはカウンターへぱたぱたと走っていく。

ふと、フィレーンの耳に、ついたばかりの客の話が入ってきた。

「エシルも例の病に門を閉めたつてよ。」

「あゝあ、物騒だねえ。死斑、か……。怖い怖い」

死斑とは、最近大陸のあちらこちらに流行りだした、不治の病。病に冒されると、紫色の斑点が体に現れるという。

ついた呼び名が死の斑点 『死斑』。何故か病に冒されるのは皆成人した大人ばかりだった。

けれど、エシルにしろ、病が蔓延している地域にしろ、ここからはまだかなり距離がある。

理屈は無いが、きつとここは大丈夫。

フィレーン是对して気にもとめず、また客の間をくるくると走り始めた。

が……。死の病は、風に乗り、気づかぬうちに足を忍ばせ、着実にフィレーン達のすぐ傍に迫っていたのだ。

セシユの様子がおかしい。

そう気づいたのは、夜中によく咳き込むようになったから。

あの明るく元気だったのが嘘のように、疲れた表情を見せるようになった。

客達の興味はあの病へと向けられていた。

セシユは『あの病』に犯されているのではないか？

碧眼の黒猫亭からは客の足が途絶え、街からは人の姿が消えた。

「セシユ・・・」

辛そうにヴァスがセシユの背を撫でていた。

「わかつてるわよ。ヴァス。・・・すまないわね。もう、ここに
いることは無理そうね。・・・うん。ここだけじゃないわ。きつと
もう、どこの街にも入れないわね。」

ゴホゴホと咳き込みながら、掠れた声でセシユが小さくつぶやいた。
フィレーンは

フィレーンは、どうすることも出来なかった。

ただ、黙って二人の話から耳を遠ざけた。

キタクナイ。シンジタクナイ。モウ ウシノウノハ イヤ。
けれど。

静寂を破り、ドアが叩かれた。

ヴァスが静かに立ち上がって、扉を開ける。

切れ切れに聞こえてくる、女将とヴァスの会話。

「あんた・・・世話になった・・・」

「・・・すまないねえ・・・。けれど・・・あがつたりなんだよ・・・。」

「色々ありがとう・・・。」

ぱたん、と閉じる扉の音が、いやに冷たく聞こえた。

ぎゅっと目を閉じ、耳をふさいだフィレーンの傍へ、ゆっくりとヴ
ァスが近づいてくる。

肩を叩かれた。

ヴァスの大きな手。悟りきったような、澄んだまっすぐな目。

「わかってるよな？ファイ。」

優しい、優しい、そして、切ない笑み。

フィレーンは黙ってヴァスに抱きついた。

涙が止めどなく流れた。

「ヴァス……。ボクも、貴方達と一緒に行く。」

どうか、どうか一緒にいさせて。

切なる願いを込めて、やっとの思いで紡ぎ出した言葉。

だが、ヴァスはゆっくりと頭を振った。

「いいや。ファイ。お前はまだまだ、生きなくっちゃいけない。お前の母親の命。そして……。これから消えゆく俺たちの命を、お前は背負っているんだよ。お前はまだ幼い。もっと色々な世界を見て回らないとな。死ぬのは、それからいい……。」

ゆっくりと、ゆっくりと、大きな手が、フィレーンの頭を撫でた。

もう、何も言えなかった。ベッドの上で、静かな笑みをたたえ、セシユも泣いているようだった。涙は、見えなかったが。

宵闇があたりを包み始めた。

酒場にはまばらな人影。あれほどにぎわっていた酒場も、今は2、3人の客だけになってしまっていた。

ヴァスはリユートを抱え、一人舞台へと上がった。

歌姫の姿は無かった。そして、いつも元気に走り回っていた少年の姿も。

「ぼーず、今日は来ないのか？」

いつも軽口を叩いていた客が、のろのろと口を開く。
ヴァスは、苦笑を浮かべると、軽く肩をすくめた。

「俺がここで弾くのも、きつとこれが最後になるだろうな。」

調律を済ませ、ヴァスは大きく息を吸い込むと、静かに弦をつま弾き始めた。

と。その時だった。

一瞬、舞台が緋色に染まる。

セシユがいつも身に纏っていた薄布の緋。

はつと、その場にいた者すべてが、舞台の上へと釘付けになった。

朱金の短い髪。そして、鮮やかな緋色の薄布が、宙を舞った。

それはさながら妖精のように、天使のように、舞台の上に舞い降りたのだ。

「ヴァス。続けて・・・」

フィレーンの小さな声に、ヴァスは、はつと我に返った。

五指が絶妙な旋律を紡ぎ出す。

「ぼーず・・・じゃ、無かったのか・・・」

客の口から、ため息が漏れる。

シャラン、と四肢に付けた鈴が鳴る。

しなやかな小さな姿態が宙を舞う。

徐々に、徐々に客が集まり始めた。

上階から、歌声が、リュートの音に重なる。

その歌声は、とても病に冒された者とは思えない、どこまでも高く、稟とし、澄んだ夜空に染み渡っていった。

朝日があたりを金色に染め上げた。

総勢16名。死斑の感染者と思われる者達が、国から派遣された兵士によって、街の外に出された。

そして、その中には、あのセシユとヴァスの姿もあった。

双方を隔てているのは、門の両脇に立ちふさがった無表情の兵士。

街を追われた者達に持たされるのはわずかな食料と水のみ。そして、門の先には、深い森へと通じていた。

もう二度と街へ踏み入れることは出来ない。

やがて皆、森の木々の糧となるのだ。

それを知っているにもかかわらず、皆一様に穏やかな表情を浮かべていた。

フィレーンは門を隔てた、碧眼の黒猫亭の女将の腕に預けられていた。

じっと見つめ合う、親子。血は繋がっていない。まだ、出会って1年と経っていない。

それでも、三人は、確かに固い絆で結ばれた親子だった。

ぎい・っつと軋む音を立て、門が閉じていく。ゆっくりと、16人は街に背を向けた。

村に残された者達は、ある者は泣き崩れ、ある者は目を背け・・。

ある者は、その目に最後に刻み付けるかのように、じっと見つめていた。

ふいに、フィレーンは女将の腕を振りほどくと、門のギリギリまで走り寄った。

兵が槍で行く手を阻んだ。

ずっと、言いたかった言葉。照れくさくて言えなかった言葉。まだ、言えなかった言葉。

「とうさん・・・っ！！！！かあさーんっ！！！」

兵にすがりつくように叫んだ。大粒の涙が、セシユとヴァスの姿を曇らせた。

にじむ景色の中、わずかに開いた扉の間から、こちらを振り返るセシユとヴァスの嬉しそうな笑顔が見えた・・・ような、気がした。

数年後

一人の少女が、小さな体に不釣り合いな荷物を抱え、古びた宿屋を後にした。

まだ、夜も明け切らぬ時間帯。見送りはいない。いらぬ。心の中で、オルゴールの音が聞こえる。

『もっと色々な世界を見て回らないとな。』

うん。ヴァス・・・とうさん。ボク、行くよ。この広い世界を、どこまでも。

まっすぐに、門の先を見据える。あの頃と違うのは、大きく外へと開け放たれた門。

そして、両親の去っていった門と、反対側の。大事な大事な、両親。ほんの僅かな時間だったけれど、暖かく、優しい時間。忘れることは出来ない。

否。決して忘れることはない。忘れない。けれど、フィレーンにとつては、過去。

見据えるのは未来。両親の面影を胸に抱いて、フィレーンは大きく一歩を踏み出した。

まだ見ぬ未来が、この道の先にある。

ミューズの子 (後書き)

初めて書いた小説です。つたない文章ですが、最後までお付き合い有難うございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8462f/>

ミューズの子

2010年11月12日19時05分発行